

答えのない問いに もがく青春時代 いつも傍らにあった一冊



磯貝 曉成

初等部長予定者



デミアン
ヘルマン・ヘッセ
新潮文庫

中学3年生のころ、自分は何のために生きているのかと問わずにはいられない時期が続きました。誰にも訪れる死への恐怖に目覚めたのがきっかけです。誰に聞いても的確な答えが返ってこないもどかしさから抜け出せないでいる時に出合ったのが「デミアン」でした。導き手のデミアンは、私の死の恐怖は自分が自分になる過程に起こってくるものだと語りかけてくれました。

答えは見つからないまま、高校、大学と、デミアンは人生の区切りにいつもいました。第一次世界大戦が終わり、ドイツの青年が目指すべき道を見失った1919年に書かれたこの作品を、今ではすっかり忘れていたのは、私自身がデミアンを生きるようになっていたからかもしれません。

学生には、学んでいく上で読まなければならない本は、読んでいないと会話にならないという怖さを知ってほしいです。また読書は、自分の世界を見える世界と見えない世界の両方において広げていってくれます。見える世界だけの人間では寂しい限り。深く秘めたものが宿る人であってほしいと思います。